

# 会津の歴史シリーズ



## 第3回 会津の歴史② (蒲生時代)

湯田 祥子 (ゆだ さちこ)

若松城天守閣郷土博物館  
学芸員



### ◆鶴ヶ城をつくった蒲生氏郷とは

奥州で頭角を現しつつあった伊達政宗から、会津の土地を没収し力を削ぐことに成功した豊臣秀吉<sup>とよとみひで</sup>よ吉にとって、古くから奥羽の要として位置づけられてきたこの地を治める人物は、それなりの器量人でなくてはならなかった。群雄が割拠し、戦さがそこかしこで起こっていた戦国時代、いくら全国の武将のほとんどを従わせた秀吉といえども、関東や東北の不穏分子を抑えるには、力もあり人望もありなおかつ自分がコントロールできる（と思っている）将を会津に配置する必要があったのである。そこで白羽の矢が立ったのが、近江を中心に活躍していた蒲生氏郷<sup>がもうじきと</sup>だった。

蒲生氏郷は弘治2年（1556）近江の名家・蒲生家に生まれる。13歳の時に、周辺一帯を平定した織田信長<sup>おだのおなが</sup>のもとに人質として送られたが、その出会いによって氏郷のその後の人生が一変したと言っても過言ではなく、氏郷がみせた大器の片鱗に惚れ込んだ信長は自分の娘を嫁がせ、氏郷は信長の娘婿となった。その後、信長が明智光秀<sup>あけちみつひで</sup>の謀

反によって討たれると、氏郷は豊臣秀吉に仕えることとなっていく。

秀吉は、近江の名門蒲生家の出自という血統や



蒲生氏郷画像 模写（会津図書館）

原本は西会津町・西光寺所蔵で国の重要文化財に指定されている

織田信長の娘婿という立場、そして才能や若さなど自分には無いものを持つ氏郷を、妬み恐れる気持ちもあったのではないだろうか。天正18年(1590)の北条攻めにより日本のほぼ全てを手中におさめた秀吉が、いわゆる自分の施政代行者として東北地方の統括を任せられたのが氏郷だったが、これは秀吉の氏郷に対する警戒心の表れだとも考えられ、少しでも都から遠ざけておこうという魂胆だったようにも思える。この時氏郷はまだ30代半ばという精神、肉体ともに充足した時期である。時代の中心であった近江や京から遠く離れた奥州に追いやられることは、氏郷自身にとっても、マイナスと思える要素の方が勝っていただろう。歴史書『常山紀談』によれば氏郷は「小国でも都に近ければ天下を狙えたものを…」と会津への移封を嘆いた、という逸話が残されているくらいである。わずかでもチャンスがあれば天下を手中におさめてみたいという野望を氏郷も抱いていたということだろうか。そんな氏郷にとっては、悲喜交々の複雑な大出世だった。

#### ◆鶴ヶ城のはじまり

鶴ヶ城は東北地方随一の規模を誇り、戊辰戦争の悲劇でよく知られる城である。そして実は、初めて会津に本格的な城を築いたのが、蒲生氏郷である。氏郷が会津入りする以前は石垣や濠に囲まれ天守閣を備えた、いわゆる「城」というものは存在しなかった。そのため氏郷は、近江から職人集団を呼び寄せて本格的な城郭を築いたのである。特に有名なのは石垣を築く専門職集団として有名な穴太衆などだろうか。また、このとき城づくりとあわせて城下町づくりも始まったが、町割などは400年以上たった現在も、このときの名残をとどめている。

いろいろな説があるが、文禄2年(1593)に

完成した城は、氏郷の幼名「鶴千代」にちなみ「鶴ヶ城」と名づけられたというのが有力である。城の敷地の中心部には七層の天守がそびえ、金箔がほどこされた瓦を使用し、本丸・二ノ丸・三ノ丸が天守を取り囲むように配置され、櫓や馬出といった城にとって非常に重要な防御のための工夫を設け、城の周りには水をたたえた濠や空濠が作られた。

濠の外側には侍屋敷が配置された。その外側には天然の河川を利用した外堀と土塁がさらに張り巡らされたほか、16もの郭門で侍屋敷(郭内)と商人や町人たちの住む町(郭外)とが区別された。さらに防御手段として道路には食い違いが作られたほか、もともと郭内にあった興徳寺を除き、すべての大きな寺社が郭外に移転された。敵に城下に攻め込まれた時には、寺社の広大な敷地を防御線に利用しようと考えたのだろう。氏郷が、自分の守る領地をここまで防御に重点を置いた形に作り変えたのは、やはり“戦い”を念頭においてのことであろうし、氏郷の活躍していた時代はまだまだ戦さが日常にある時代だった。そのため、氏郷は奥羽の抑えという重要な役目を果たすにふさわしい、そして自分の権威の象徴でもある城を作る必要があったのである。

もう一つ、氏郷が会津の地に入り作り変えたものに「地名」がある。現在の会津若松市一帯は、当時「黒川」という地名だった。それを氏郷が城づくりと城下町の整備を始める際に、生まれ故郷である近江日野にある「若松の森」に因んで「若松」という地名に改めたのである。

#### ◆蒲生時代の早すぎた終焉

少し見ただけでも、このように会津の地で氏郷が果たした役割は非常に大きい。しかし氏郷が会津の領主だった期間は、実はあしかけ6年と短い。



若松の森（滋賀県日野町）

「若松」の地名の由来となったといわれる氏郷の故郷・日野の若松の森

そしてさらに、氏郷が会津の地にいた期間はもっと短いのである。氏郷は、会津に赴任するとすぐに、奥州（東北）地方一帯で起こった一揆の鎮圧にかり出された。この時は、氏郷の前の会津領主だった伊達政宗も鎮圧部隊に名を連ねていたのだが、政宗が裏で一揆を扇動し氏郷を亡き者にしようと謀略を張り巡らせていた疑いがあったのである。政宗のはかりごとに関する事実だけ見れば限りなく黒に近かったわけだが、氏郷と政宗の間で裏切りが無いことを確認し合い、協力しあって一揆の鎮圧に成功した。豊臣秀吉はこの件について処罰することはなかったが、最終的には氏郷の功績として政宗の領地を没収し氏郷へ加増するという形で決着させた。

この後にも、文禄元年（1592）には豊臣秀吉の命により全国の武将達が朝鮮に出兵するため参集され、氏郷も従軍しているが、この時は実際に朝鮮半島での戦いには参戦せず、前線基地である肥前名護屋（現在の佐賀県唐津市）に滞在するだけとなった。そしてこれが、氏郷にとっての最後の

活動の場となってしまった。なぜなら氏郷は、この名護屋在陣中の文禄2年に発病し、同4年には40歳という若さで世を去ってしまったからである。氏郷の早すぎる死については、様々な噂・特に毒殺説がまことしやかに流れたが、これは、それだけ氏郷の武将としての有能さや秘めていた可能性を、当時の人々がしっかりと認識していたためだろう。

そして、悲劇はこれで終わらないのが、蒲生氏郷と蒲生家の悲しいところである。氏郷の跡を継いだ秀行<sup>ひでゆき</sup>、そして秀行の子忠郷も、それぞれ30歳と25歳の若さで世を去ってしまう。さらに、忠郷の跡は弟の忠知<sup>ただちか</sup>が継ぎ伊予松山<sup>いよまつやま</sup>に領地替えになったのだが、なんとこの忠知も急逝する。こうして、近江の名門から出、会津を治めた蒲生家は氏郷から数えて3代で断絶してしまった。

蒲生の後に会津を治めたのは忠知と交代して伊予松山から入った加藤嘉明<sup>かとうよしあき</sup>だが、嘉明も加増されても会津への移封を嫌がったと伝えられていることは、皮肉なものである。